

川芎も良薬なり、古は本朝にはなかりしを、寛永の比長崎よりたねを傳へ來て、大和にて多く作る、其外諸所に作るは性よからず、先たねに取置事は、蘆頭と又は小節のある細き所を、ほり取時別にゑり分置、桶か箱に沙を入、いけ置て、すぐれて肥たる性よき土の上、島を冬よりさいく、耕し熟したるを、又二三月の比よくこなし、畦作りし、横筋を麥をうゆるごとく、八寸一尺ばかりも、間を置て切、ならびの間も、六七寸に一科かよづ、うへ土をおほひ置、生て後芸り培ひなど、他の作り物に同じ、糞を用ゆる事、先初めは少づ、をくべし、花のつぼむを見てより、多く入べし、沙がちなる黒土、又は白きもよし、但中分より下の土には必作るべからず、吉野にて作る島は、赤土に沙少少小石も交りたる、いかにも肥たる山島なり、掘取事は、十月十一月の間よし、鬚をよくむしり、わきの細根も悉く去りて、淨く洗ひかはかしをくべし、釜に湯を立、一あは煮て、箸にてさして見るに、よくぬくる時、其ま、あぐべし、煮へ過ればあし、干上る事は、干過ると云事なし、是又四物湯の一色、其外諸方に多く用ゆる物なり、山下など性よき肥地ある所にては、多く作るべし、厚利の物なり、

〔廣益國產考一〕國產となるべき物を左にあぐ

川芎 薄地を修理して作れば、よくできるものにして、香氣も格別よろし、豊後岡領にて多く作り出す也、

〔延喜式三十七諸國進年料雜藥

尾張國卅六種略○中 芎藭廿二斤、遠江國十三種略○中 芎藭三斤略○下

〔本草和名八〕藁本蘇敬注云、根上苗下一名鬼郷、一名地新、一名薇莖本一名微玉出兼和名加佐毛知、一名佐波曾良之、

〔倭名類聚抄二十〕藁本 蘇敬本草注云、藁本和名佐々波曾良之、一云曾良之、根上苗下似藁故以名之、

藁本